小学校英語及び英語活動実施状況調査

瀧口　　優・町田　淳子*・井上　恵子**

報告

研究実績の概要

はじめに

小学校では2020年４月から５年生と６年生に教科としての外国語（英語）が導入され、従来の外国語（英語）活動は５・６年生から３・４年生に下ろされた。コロナ禍の中で１年間取組んできた結果を記録に残しておきたいということで全国の小学校にアンケートを送り、その結果をまとめるのが本調査の目標であった。

この調査については４年前の2017年、７年前の2013年と同様の内容で行い、比較検討するということを基本としていた。調査対象は全国の市または東京特別区合わせて808から小学校を１校ずつ選んで調査用紙を送ることで全国の状況がつかめると判断した。また学校対象の調査と合わせてALT（外国人英語助手）や各地で入っている英語支援員も含めて調査することで、立体的に状況把握をすることであった。

調査の概要

全国の学校から届いた調査用紙は170であり、前回に比べると減ったが2013年とほぼ同じ数となっている。３回とも同じ学校に送っているにもかかわらず、回答校の重なりはそれほど多くはない。その時の管理職や担当者の対応によるものであることが読み取れる。

学校の調査からは、教科としての英語が始まって戸惑いがあるという中で、授業担当者が専科になりつつあり、小学生に相応しい授業を行っているという様子がうかがえた。ただしアンケートを返してくれた学校は授業がうまくいっている学校であることが予想される。また外国人英語助手からは英語で様々な成果と課題が寄せられ、全国で努力している様子が伝えられた。回答数は90で前回とほぼ同じである。また支援員からは34の回答が寄せられたが、これも前回とほぼ同じである。小学校の担任を支えて苦労している様子が伝えられた。

まとめ

小学校３・４年生に移った英語活動については、子どもたちが活動に積極的に参加することで楽しんでいる様子が報告されたが、５・６年生の教科としての英語は、書くことや文法などが入ってきて、かなり難しくなっているという印象があり、それをどのように子どもたちに教えていくのか、それが課題となっていること、更にこれから中学に入っていくにあたってどのようなことを重視すれば良いのか戸惑っていることなどが書かれている。小中連携なども考えて行く必要があることなども出されている。なお詳細については別途まとめを作成しているのでそちらを参照して頂きたい。今年度は報告書の作成と必要校への配布を予定している。

＊嘱託研究員　子ども学部非常勤講師
＊＊嘱託研究員